BOOK X — 見えざる戦争

第10章 — その先のどこか

01 — 翌朝

朝、ロイが最初に耳にしたのは、階下で椅子を床の上に引きずる音だった。数秒の間、自分がどこにいるのか思い出せなかった。通りを車両が通過するのに合わせて、淡い光の筋が天井を横切るのを眺めていた。

レイチェルはベッドの脇のマットレスで眠っていた。足元には彼女のコートが掛けてあった。男が貸してくれた枕が薄すぎたため、もう一枚の毛布を畳んで頭の下に敷いていた。

ロイは彼女の方を向いた。その動きで腕の下の支えがずれ、すぐに覚えのある痛みが走って、それ以上動くことができなくなった。

痛みが引くまで、彼はじっと横になっていた。

途中で目を覚ますことなく、数時間眠っていた。それ自体が、少し考えてみるに値するほど珍しいことに思えた。かつて彼の身体は、ある任務に取りかかる前にどれほどの睡眠が必要なのかを、驚くほど正確に知らせてくれた。今では、その情報を得ることができない。長く起きすぎていたことや、前日にできたことが今朝はもうできないことしか、身体は教えてくれなかった。

レイチェルが目を開けた。

「もう遅い時間？」

「そうでもないと思う」

彼女は窓の方を見て、身体を起こした。しばらく二人は言葉を交わさずに見つめ合った。互いに、相手が夜の間に消えてしまわなかったことを確かめる必要があるかのようだった。

テーブルの上の容器には水が入っていた。レイチェルは彼のために水を注ぎ、眠れたかと尋ねた。

「ああ」

「腕は？」

「まだ試していない」

「それでいいの」

彼は微笑んだ。彼女は微笑まなかった。

自分の能力を調べることと、不必要にその能力を使うことを区別するのが彼にはひどく難しい。そのことを彼女は笑い事だとは思っていないのだと、ロイには分かった。病院では、ほとんどあらゆる回復を、その程度を確かめる機会と捉えていた。機密指定人員との遭遇を通じて、そうすることの代償を多少は学んだ。

食べ物の匂いが部屋に漂い始めると、二人は階下へ降りた。昨夜二人を迎え入れた男が、長年使い込まれた跡のある板の上でパンを切っていた。年配の女性が給水容器の脇にカップを並べていた。

男は、もう一晩泊まるつもりかと尋ねた。

レイチェルは、どうするか考えているところだと答えた。

「今日の午後までは部屋を使っていいよ。その後は息子を連れた女性が来るんだ。あの子は別の場所の階段を上れなくてね」

ロイは礼を言った。男はその事情を口にしたことを気まずそうに思ったのか、女性が何日も待っていたのだと説明し始めた。

「説明しなくていい」とロイは言った。

二人は窓辺で食事をした。道路の向こうでは店主が窓を覆う金属板を取り外していた。昨夜到着したときには閉まっていた店で、靴を売っていることにどちらも気づいていなかった。

レイチェルはリアン医師からのメモを広げた。夜の間に二度読んだものだった。そこにはロイに常時の監視が必要だという記述はなかったが、追加の診察を受けずに長旅をしてよいという根拠もなかった。

「先生と話さなくては」

ロイも同意した。

「それから、どこへも行くべきではないと言われたらどうするのかも、決めておかなくてはね」

彼は通りを眺めた。レイチェルが目を覚ます前から、二つの可能性を考えていた。一つはできるだけ早く都市を離れること。もう一つは、自分を助けてくれる人々の近くにとどまることだった。どちらを選んでも、発見されることは想像できた。

「できないことを決める前に、何ができるのかを先生に聞いてみよう」と彼は言った。

レイチェルはメモを鞄に戻した。

部屋の反対側では年配の女性が新しいカップの包装を開けようとしていた。ロイは手伝おうと立ち上がったが、両手を使わなければならないことに気づいて足を止めた。代わりにレイチェルが向かった。

彼女が戻ってきたとき、彼はまだテーブルのそばに立っていた。

「俺にもできることがある」

「分かっているわ」

彼女は持って戻った二つのカップを彼に渡した。彼は一つずつ女性のところへ運んだ。

それは自分の能力がどこまで発揮できるかを確かめる必要のない、今朝初めての仕事だった。

02 — 生命の時間

エイドリアンは事務所が開く前に医療協会へ到着した。セラ・ミンが見つけたとき、彼は玄関ホールのベンチに座り、両膝の間に書類ばさみを挟んでいた。彼女は午後まで会う予定はなかった。

「何か見つかりましたか？」

「索引を覚えている人が見つかりました」

彼は、所蔵資料がいくつかの当局に分割された研究機関の元職員と話をした。その職員は目録の構成については話してくれたが、そこに記載された文書の一部については一度も目にしたことがないと明言していた。

ミンは事務所の鍵を開け、照明をつける間待つようエイドリアンに頼んだ。

彼は三枚の紙を机の上に並べた。前夜イマニと照合した記述と、研究記録の移管に関する指示書の写しだった。

指示書は、資料が後に機密指定を受けるより前に発行されたものだった。記録の移管時に保存すべき情報の種類が列挙されていた。その中には修復の観察、検査の間隔、そして一連の観察を中止する条件についての記載があった。

観察結果そのものは含まれていなかった。

「これは記録を保管するための指示書ですね」とミンは言った。

「ええ。ただ、中止する理由が二種類あるんです」

彼は指示書の区分を指差した。一方は生物学的な観察の継続が不可能となった場合。もう一方は被験者が研究に参加し続けるための許可が失効した場合だった。

ミンは該当する箇所をもう一度読んだ。

「その二つの区分は実際に適用されたのですか？」

「それを示す記録は手元にありません」

「では、まだ生きられる状態の誰かが研究から外されたとは言えませんね」

「ええ。しかし、誰かがその二つの理由を区別しておく必要があると考えたんです」

ミンは彼を見た。なぜ事務所が開く前に来たのか分かった。

長年、人工生命の管理は、その存続期間について、このような区別の余地がほとんどない説明に依存してきた。レプリカントに期待される寿命は、そのレプリカントに許された寿命だった。その二つが終わるとき、公的文書で使われる用語は、一つの出来事が起きたことを示唆していた。

目の前の文書は、人工の身体がどれほど長く生きられるかを証明するものではない。ただ、研究の歴史のある時点で、生物学的な出来事と行政上の出来事との区別に、記録するだけの価値があると考えられていたことを示していた。

「軍の目録では、その区別はどうなっていますか？」

エイドリアンは、そこには見当たらなかったと答えた。後の目録にある短縮された記述には、資料の参照情報と運用期間に関する見出ししかなかった。その区別が文書自体に残されているかどうかは分からなかった。

二人はしばらく黙っていた。

ミンは、元職員が索引の構成について声明を出す用意があるかと尋ねた。エイドリアンは聞いてみると言ったが、閲覧を一度も許されなかった資料に関する調査に、その男を巻き込みたくはなかった。

「私から連絡を受けてもよいかだけ聞いてください。それ以上は必要ありません」

彼女は移管指示書の写しを取り、出所と入手日を記入した。それからエイドリアンとイマニが昨夜送ってきた声明書を取り出した。

二人はそこに追記する内容に合意した。三つの文からなる追記だった。どの文にも百年という言葉はなかった。

「レイチェルにも見せたいですね」とエイドリアンは言った。

「彼女にその余裕ができたら」

彼はうなずいた。ミンがレイチェルの滞在先に送ろうと言わなかった理由は分かっていた。この研究を始めた全員にいつでも連絡できることを前提に、今後の研究を計画するわけにはいかないことも分かっていた。

彼は紙を再び書類ばさみに収めた。

「以前は、失われた方法を探していると思っていました」

ミンは彼が話し終えるのを待った。

「今では、それを探していた人々の中には、私たちとは異なる問いを立てていた者もいたのではないかと思うんです」

彼女は運用期間に関する記載を見た。

「では、彼らの記録と一緒に、彼らの問いまで受け継いでしまわないようにしなくてはなりませんね」

エイドリアンは確保作戦が始まる前に使っていた道を通って病院に戻った。朝の光の中で道路を横断する人々を眺めた。仕事に遅れそうな者、誰かに食べ物を運んでいる者、まだ急ぐことを覚えていない子供たちと並んで歩く者がいた。

かつて百年という言葉は、研究の目標を表すのにふさわしい名称だと彼は考えていた。

今では、一日の午後をどう過ごすか自分自身で決める権利の方が、はるかに難しい目標なのかもしれないと考え始めていた。

03 — 残された命令

九時を少し過ぎた頃、デレン大尉はヴェイル大佐の執務室へ呼ばれた。到着すると、室内にはもう一人の士官がいた。法務部門の女性で、確保の承認と、協力する民間当局に伝達された指示との関係を調査するよう求められていた。

テーブルには十四の機関の一覧があった。それぞれの名称の横には、照会された情報の内容を示す欄があった。ロイに関する情報もあれば、当初の照会が誰を対象にしていたのか、もはや特定する手段のないものもあった。

女性は、どのような条件であれば、それらの住所のいずれかへ機密指定人員を派遣できるのか説明するようデレンに求めた。

彼は前夜に記録した指示に言及した。

「対象者が現地にいることの確認です。機関に照会が伝達されたことの確認ではありません」

彼女はメモを取った。

「その区別は守られていますか？」

「私の指揮下では守られています。他の部門については答えられません」

ヴェイルは、情報交換に関する新たな指示を発行することで問題を解決できないかと尋ねた。

女性は、派遣に必要な情報の定義は可能だと答えた。問題は、民間への照会のうちいくつかが、当初の作戦を承認した規定とは異なる規定の下で行われていることだった。

デレンは再び一覧を見た。今朝も十四の建物すべてに出勤する人々がいる。彼らの名前すら知られていない執務室から出された指示が、彼らが患者を受け入れられるか、職員の退勤を許可できるかを左右するかもしれなかった。

法的な審査が作戦を終わらせるなどという幻想を抱いてはいなかった。死者が出たのだ。風変わりな人物の所在がつかめないというだけの理由で確保命令が出されたわけではない。それを承認した者たちは、対象者の存在を国家安全保障上の問題と見なしていた。ハヴェルの死は、その確信に基づいて行動を起こす機会を彼らに与えた。

しかし、再度の派遣で病院では達成できなかった何を達成できるのか、明らかにすることは難しくなっていた。対象者はこれまでの遭遇を生き延びている。作戦の結果、機密指定人員二名が医学的評価を受けた。ロイ自身の医学的状態も、作戦立案時の前提を支えられるほど確実には分かっていなかった。

デレンはM-08の最新の評価を見せるよう求めた。

ヴェイルが写しを渡した。その人員に許される動作が再び見直されていた。依然として任務に就ける状態だったが、医師は負傷した手に負荷をかけて使うことに懸念を示していた。

「派遣指示には、それに対応する制限がありません」とデレンは言った。

「追加できる」

「任務に就ける状態と判断する前に追加しておくべきでした」

ヴェイルは答えずに彼を見た。

法務部門の女性は書類ばさみを閉じた。民間への照会に関する審査が終わるまで、その照会に起因する派遣については、他部門から直接要請を受けるのではなく、指揮部の確認を必要とするよう勧告するという。

デレンは、それに沿った命令を午後までに出せるかと尋ねた。

彼女は約束できないと答えた。

会議が終わると、ヴェイルは彼に残るよう求めた。

「捜索をやめるべきだと思うか？」

ここ数日、デレンはさまざまな形で同じ問いを向けられていた。特定の場所や特定の人員と結びつけずに問われたのは、これが初めてだった。

「彼を捜すことと、身柄を確保することが同じだというふりを、やめるべきだと思います」

ヴェイルは窓辺へ歩いた。遠くに、行政地区から出る道路を走る車列が見えた。

「承認を出した者たちは、その区別をする気がないかもしれん」

「ならば、そう明言するよう求めるべきです」

大佐はしばらく窓辺に立っていた。新たな指示を受けるまで、現在の派遣制限を維持するとデレンに告げた。

デレンは執務室へ戻り、その決定を作戦記録に入力した。それから指揮車両の位置が表示される地図を開いた。

前日よりもマーカーは少なかった。いくつかの車両は別の任務に戻されていた。残りはまだ所定の位置で待機していた。

彼らが確保するよう命じられた人物を示すマーカーは、依然としてなかった。

04 — 自分自身のための予約

午前の遅い時間、M-06は自分の診察に関する声明書の写しを渡された。事務職員が部門内の取り決めに関する二つの段落を削除していた。残った部分には、彼女が確認するよう求められた事項についての記述があった。

彼女は机のそばに立ったまま声明書を読んだ。

「診察の内容は確認されなかったと書いてあります」

職員はうなずいた。

「誰によって確認されなかったのですか？」

彼は、診察についての記述が部門に提出されていないのだと説明した。

彼女はその文言に異議を唱えるべきか考えた。そのような記述が提出されていないのは事実だった。しかし、診察について特に確認が難しいことがあるわけではなかった。彼女も医師も、その場にいたのだから。

「私自身の声明書を作成してもよいですか？」

彼は補足の声明書を提出できると答えた。

彼女は紙を一枚求めた。自分自身のために診察を希望し、外出を許可された時間内に受診したこと、もう一度診察を受けたいことを書いた。職員は声明書を読んで、最後の一文を別の要請書にすることを希望するかと尋ねた。

「はい。でも、ここにも残しておきたいのです」

彼は紙を受け取った。彼女は、自分に渡された声明書にその紙が添付されるのを見ていた。

診察を受けたときに自分のための記録を残すことができていたなら、他人が作成した記述を訂正するために午前中を費やす必要はなかったはずだ、という考えが彼女の頭をよぎった。

彼女はもう一枚の紙を求めた。

今度は診療所の名称、受診日、到着時刻を書いた。その下に、予約について医師が述べたことで覚えている内容を書いた。紙を畳み、ポケットに入れた。

「それも記録に加える必要がありますか？」と職員が尋ねた。

「いいえ」

共用室に行くと、M-08が負傷した手をクッションに載せて座っていた。正午に医療部門へ戻るよう言われていた。彼は確保作戦が始まる前に参加した訓練の映像を見ていた。

M-06は数分間、彼と一緒に映像を見た。実際の動作を見る前に、彼が何をするのか予測できる場面が何度かあった。

「痛みについて相談しましたか？」

「これからする」

彼は映像を止めた。

「痛むと言えば、この手でどこまでできるのか知りたがるだろう」

彼女は、その問いへの答えも医師には関心があるかもしれないと言った。だが、医師が関心を抱くことは、それだけではないはずだった。

彼は彼女を見た。

「君が診てもらった医師は、何を聞いたんだ？」

彼女は、尋ねられたことの中には任務遂行能力と無関係なものもあったと話した。医師が関心を持っていたのは、彼女に何が起こったのか、それについて以前とは違う考え方をするようになったのはどのような状況においてだったのか、ということだった。

M-08は再び映像を再生した。画面の中で彼は、自分に向かって投げられた物体を受け止めた。装置を操作していた者が、物体が放たれてから彼の手が動くまでの間隔を記録していた。

「あれがどんな感じだったか、覚えていない」と彼は言った。

彼が動作そのものについて言っているのか、それを行ったときのことを言っているのか、二人とも分からなかった。

職員が彼を医療部門に呼んだ。彼は立ち上がり、椅子の上にクッションを残して出ていった。

M-06は窓辺へ行った。門は開いていた。配送車が施設に入るのを待ち、警備員が運転手と話をしていた。

今すぐ無許可で出ていこうと考えていたわけではない。自分自身のために希望した診察が、他人によって自分のいるべき場所と見なされている施設から、外出の許可を得ることでしか受けられないのはなぜなのか。彼女は依然としてその答えを見いだそうとしていた。

コートのポケットの中に、医師のカードの縁を感じた。

裏面にはまだ日付が書かれていなかった。

彼女は廊下の電話まで行き、事務部門に電話をかけた。二度目の要請が受理されたかどうかを知りたかった。

職員は受理されたと答えた。

彼女は参照番号を尋ねた。

今度は、通話を終えるよう求められる前に番号を書き留めた。

05 — 二人に可能な旅

正午までには、日の光が建物の外の歩道を乾かしていた。レイチェルは道路の向かいで店を営む女性の電話を借り、リアンと話すことができた。医師はロイの状態についていくつか質問し、午後に診察する手配をしてくれた。

診療所は下層地区にはなかった。前日の朝から自治体による検問が行われている道路がいくつかあり、到着までどれほど時間がかかるのか、レイチェルには分からなかった。

二十分後、リアンから再び電話があった。坂をさらに下ったところにある地域診療所の医師が、彼女から提供される情報を基にロイを診察してくれるという。レイチェルはロイに、その情報の送付に同意するかと尋ねた。

彼は同意した。

もう一人の患者が到着する前に、部屋を出なければならなかった。ロイがベッドの端に座っている間、レイチェルは毛布を畳んだ。階段を降りたところで、男が朝食の残りを入れた袋を渡してくれた。

ロイは手元に残っている金を差し出した。

「取っておいてくれ」と男は言った。「俺たちより君たちの方が必要になるよ」

ロイは、ほかに何か渡せるものはないかと尋ねた。

男は二階の修理済みのベッドを指差した。

「あれを動かさなかっただろう。今日はそれで十分だ」

昨夜ロイが入ってきた扉から、二人は外に出た。雨によってかなりの量の泥が通りの両側にある浅い排水溝へ流れ込んでいた。まだそこを水が流れていた。

レイチェルが袋を持った。ロイの前を歩くことも、無事な方の腕を取って導こうとすることもしなかった。彼が足を止めると、彼女も足を止めた。

診療所までの道のりには、予想していたよりもずっと時間がかかった。彼は二度、腰を下ろす必要があった。二度目には、尋ねられるまでもなく、しばらくここにいたいと彼女に告げた。

彼女は閉まっている店の前の低い塀に、彼と並んで腰を下ろした。

「まだ歩けるって、何度も言わなくていいのよ」と彼女は言った。

「別のことを言おうと思っていたんだ」

彼は通りの向こうで、父親が長いパイプを運ぶのを手伝っている少年を眺めていた。

「初めて俺に年齢を尋ねたときのことを覚えているか？」

レイチェルは覚えていた。彼が自分の意図したとおりに問いを理解しているか、確信が持てなかったのだ。

「あなたは二つの答えを出そうとしたわね」

「どちらかがお前の役に立つと思った」

「どちらも役に立ったわ」

彼は少年と父親が建物の入り口に消えるまで見つめていた。それから、これまで滞在したすべての場所を合わせて、二人はどれくらいの時間を一緒に過ごしたと思うか、と尋ねた。

彼女は、かつて日数を数えようとしたことがあると言った。何をしていたかは思い出せても、何曜日だったかは思い出せない時期があった。二人の記録の一部は失われ、別の一部はもはや連絡が取れなくなった人々の手元にあった。

「もう一度数えてほしい？」

「いや」

彼は記憶のない十一年間について考えていた。その歳月の欠落と、今の自分になったこととの関係を理解しようとして、ずいぶん長い時間を費やしてきた。今では、レイチェルと一緒にそこにいたということ以外、記録のない時期がほかにもある。そうした時間が自分のものだったことを証明したいとは、同じようには思わなかった。

立ち上がると、彼はもう大丈夫だと告げた。二人は坂を下り続けた。

診療所では、医師がリアンから以前の診察についての記述を受け取っていた。自己紹介をした後、追加の診察についてロイの同意を得て、すでに利用できる結果がある測定は繰り返すつもりはないと告げた。

彼はありがたく思った。身体の状態が変わっているのに、同じ動作をするよう求められることを恐れ始めていたからだ。

医師は道中で痛みが現れた場所について尋ねた。腕と周囲の組織を診察し、所見を以前の観察結果と比較して、固定具を調整した。好ましい兆候がいくつか見られる一方で、まだ評価できないこともあると告げた。状態を悪化させた活動に直ちに戻ることは勧めなかった。

レイチェルは都市の外へ移動することについて尋ねた。

「どのくらいの距離ですか？」

彼女は二人で話し合った選択肢を説明した。別の地区に、かつて患者を受け入れていた共同体があることを知っていた。その施設が今も運営されているかどうかは分からなかった。

医師は、状態が安定したままであり、行き先でさらなる援助を受けられるなら、座って移動し、途中で休める機会がある旅は可能かもしれないと言った。その手配が整うまでは、どこか近くにとどまる方が望ましいという。旅を続けるのではなく医療を求めるべき状態についても説明した。

「どこに暮らすべきかを言っているのではありません」と医師は言った。「今日、その旅をすることについて、私に確認できる範囲のことをお伝えしているのです」

ロイは礼を言った。

医師がリアンへのメモを用意している間、二人は廊下で待った。壁には周辺地区の地図があった。そこに描かれた境界は、異なる診療所が患者を受け入れる地域の境界だった。道路はそこで途切れてはいなかった。

レイチェルは地図を見て、それからロイを見た。

「今日はそんなに遠くまで行く必要はないわね」

「ああ」

彼女は男からもらった食べ物の袋を取り出した。

二人分には十分な量があった。

06 — 守ることのできた記録

医療協会では、職員がミンのところに一通の書簡を持ってきた。移管された研究資料についての照会に答える責任を負う機関からのものだった。前夜よりも前に彼女が行った要請に対する返答として届いたものだった。

書簡では、その参照番号が国防行政の下で活動する当局が受領した資料の台帳に記載されていることが確認された。要請を送った住所にその資料が保管されているとは確認されなかった。その機関には、参照された所蔵資料の内容に関する文書の開示を承認することはできなかった。

書簡の末尾には名前があった。ミンはその名の人物に書面を送ることを許されていたが、さらなる質問に回答がなされるとは示されていなかった。

彼女はエイドリアンに電話をかけた。

彼はイマニと共に事務所へやってきた。三人で書簡を読んだ。資料の後の保管に関わる機関から直接、追跡していた参照情報について確認を得たのは、初めてのことだった。

エイドリアンは、資料が廃棄されたかどうかを、その機関に回答させることができないかと尋ねた。

ミンはその難しさを説明した。確認によって受領記録が残っていることは分かる。しかし、どの文書や試料が今も存在しているかについては何も語られていない。たとえ当局が廃棄についての質問に答える用意があったとしても、三人が内容を確かめることを一度も許されなかった所蔵資料を対象に回答するかもしれなかった。

「この回答は保管できますか？」とイマニが尋ねた。

「ええ」

「では、まずそうしましょう」

ミンは彼女に写しを渡した。

三人は最初期の指示書から今朝届いた書簡まで、一連の文書をたどった。人工生命の存続期間に関する当初の研究に関連した何らかの資料が国防行政の手に渡ったことは、現存する記録から立証できた。それは、国防行政が寿命を延ばす能力を持つ治療法を保有しているという主張とは別の命題だった。

イマニはエイドリアンに、別の場所で研究を再開するなら、病院にあった実験用チャンバーを再び使えるかと尋ねた。

彼は装置の一部は複製できると答えた。元の観察結果には、装置を複製するだけでは解決できない問題がある。予備的な実験の結果を十分な確信を持って解釈できるようになるまでは、より大規模な手順に取りかかる理由はなかった。

古い記録によって何年分もの研究を省けることを、彼は期待していた。

今では、最初からやり直したとしても、自分たちの発見を他人が何に使おうとしているのか知らずに研究を進めた人々とは異なる結果が得られるのかすら、確信できなかった。

イマニは予備的な声明書が書かれているページを開いた。

「私たちには、なぜそれを行うのかが分かっています」

エイドリアンは彼女を見た。

「少なくとも、何のためではないのかは言えますね」

ミンは、研究を継続する場合に関わる別の文書に、そのことを明記したいかと尋ねた。イマニは研究実施計画書を作るには時期尚早だと考えた。ただし、同意と研究結果の保管に関して既に定められた条件を、収集済みの資料と一緒に残したいとは思った。

確保作戦のために病院で研究を継続できなくなる以前に、どの版の条件について合意していたのか、三人はしばらく時間をかけて確認した。エイドリアンはレイチェルのコメントが記録された写しを見つけた。

彼女が疑問を呈した一文があった。実験の手順から参加者を除外できる条件を記した文だった。

彼女は余白に、列挙された条件のどれも満たさなくても、参加者は離脱できるのか、と書いていた。

エイドリアンはその議論を覚えていた。彼らはその文を変更したのだ。

彼は修正後の版をイマニに見せた。

ミンは別に写しを作り、ファイルに加えた。もう一つの独立機関にも保管の確認を求めると二人に告げた。文書を保管する組織のいずれも政府の照会の影響を受けないとは保証できなかった。しかし、何を受け取り、どの条件で保管することに同意したかは明らかにできた。

午後も遅くなって、リアンから電話があった。エイドリアンが事務所にとどまらなくても連絡できる電話番号を、事務所が把握しているかとミンに尋ねた。

ミンは把握していた。彼に伝えることがあるのかと尋ねた。

リアンは、医療協会の人々と面識のある二人が一緒にいることを、彼らに伝えるよう頼まれたのだと言った。どちらも協会での予約を希望してはいなかった。

ミンは理解した。

「二人とも無事だと伝えてよいですか？」

「一緒にいると伝えてください」

法律顧問は紙切れにその伝言を書いた。ファイルの番号も、以前にいずれかの人物の所在を尋ねられた場所への言及も書き加えなかった。

エイドリアンが書類ばさみを取りに戻ってきたとき、彼女は紙を渡した。

彼は二度読んだ。それから、自分たちに何かをするよう求められているのかと尋ねた。

「研究を続けてください」とミンは言った。「それがあなたの望むことなら」

彼は伝言をファイルではなく、ポケットに入れた。

07 — 機密指定されていない問い

午後遅く、改訂された指示が地域施設に届いた。協力する民間当局を通じて得られた情報に基づく派遣には、作戦指揮部による確認が必要だと定められていた。また、個々の人員が任務に就けるかどうかは、予定されている任務の内容に照らして評価することも確認されていた。

M-04はブリーフィング室の画面で指示を読んだ。その日が終わるまで施設にとどまるよう求められていた。新たな作戦が実施される場合には、要件を記した別の文書が渡されることになっていた。

部屋の反対側で、M-08が軍医と話をしていた。彼の手は再度診察を受け、その使用にさらなる制限が加えられていた。軍医は、次回の評価にも、割り当てられるかもしれない任務にも、その制限が適用されると説明していた。

M-08は手を見た。

「いつまでですか？」

「再び診察を受けるまでだ」

彼は、次の診察がすでに手配されているか知りたがった。軍医は通常の手順に従って手配されると答えた。

M-08はうなずき、それから診察の時刻が決まったら教えてもらえるかと尋ねた。

軍医は少し驚いた様子だった。職員が知らせると答えた。

M-08が部屋を出たとき、M-06が廊下で待っていた。彼は新たな制限が加えられたことを彼女に話した。彼女は医師が痛みについて何か言ったかと尋ねた。

「別の方法を試すと言っていた」

「それが望んでいたことですか？」

彼は答える前に、その問いについて考えた。

「痛みがなくなってほしかったんだ」

彼女はうなずいた。

二人は共用室へ向かった。少し遅れてM-04がやってきて、画面で読んだ内容を話した。三人の誰にも、新たな派遣指示は出されていなかった。

M-08は、それは作戦が終わったということかと尋ねた。

M-04は違うと答えた。

三人は黙ったまま座っていた。その部屋は、何をすべきか指示されるのを待つ人々のために設計されていた。椅子と画面と時計があった。これまで彼らが待っていた多くの部屋と区別できるようなものは、壁には何もなかった。

M-06はポケットからカードを取り出した。診療所は、彼女が受診できるよう手配できれば、もう一度診てくれることに同意していた。再度の外出許可の要請については、まだ決定が下されていなかった。

彼女はM-04に、自分がどれほどの期間生きていられると見込まれているのか、何か情報を与えられたことがあるかと尋ねた。

彼は彼女を見た。

「服務期間については説明を受けた」

「私が聞いたのは、そのことではありません」

M-08は二人の方を向いた。それまで時計の秒針の動きを目で追っていた。

M-04は、追加の評価が必要となる条件についての情報を与えられたことは覚えていると答えた。自分の予想される寿命と服務の条件とを区別して話し合った記憶はなかった。

M-06は、服務期間が終了したとき、その人がまだ生きられる状態だったならどうなるのかと尋ねた。

二人の男はどちらも答えなかった。

自分自身について何かを発見したと思ったから、その問いを発したわけではなかった。三人のうち誰かに当てはまる答えがあるかどうかも分からなかった。ただ、次に受ける指示とは関係がなくても、医師が教えてくれるかもしれない事柄に関心を持つようになっていたのだ。

M-04はカードを見た。

「医師に尋ねるつもりか？」

「はい」

M-08は椅子の背にもたれた。自分もその答えを知りたいと彼は言った。

一つ下の階の事務室では、事務職員が、その夕方も任務に就ける状態にある人員についての記述を完成させようとしていた。M-08の最新の診察に関する情報を受け取っていた。新たな制限を入力し、改訂した記述を作戦指揮部へ送った。

その記述には、人員が自分の生命について尋ねたいと思う問いを記入する欄はなかった。

上の階で、M-06は窓の近くの机から鉛筆を借りた。事務部門を訪ねた後に畳んでおいた紙に、二人の男に尋ねた問いを書いた。その下には、答えを書くための空白を残した。

08 — その先のどこか

リアンが二人に教えてくれた場所は、レイチェルが覚えていた場所とは違っていた。以前の施設は患者の宿泊を受け入れなくなっていたが、隣接する地区の外縁にある、より小さな建物はまだ利用されていた。そこにいる人々は、さらなる診察の手配がなされるまでの限られた期間、ロイを受け入れることに同意していた。

その取り決めがどれほど長く続くかは約束できなかった。彼らも交通の途絶や物資の調達先の変更による影響を受けていた。

レイチェルは申し出を受け入れた。二人は、目的地の途中まで行く便に乗れる停留所へ歩いた。辺りは暗くなり始めていた。周囲の建物に明かりが灯り始め、店で買った品物の袋を持って道路脇で待つ人々がいた。

バスが一台到着したが、ロイが無理なく立っていられるだけの余裕がないほど乗客が多かった。二人は次のバスを待った。彼はレイチェルに遅れてしまうことを謝った。

彼女は彼を見た。

「私がどこかへ急がなくてはならないと思っているの？」

彼は笑った。笑うと痛んだが、もう一度笑うことができないほどではなかった。

二人は次のバスに乗り、後方に二つの席を見つけた。ロイは右腕を身体に固定した状態で座った。レイチェルは窓側の席に座った。バスが坂を下るにつれ、地区の上部を走る道路が建物の陰に消えていくのを眺めた。

確保命令についての告知はなかった。運転席の上にある画面には、前日に中断された運行が復旧したことを知らせる通知が表示されていた。何人かの乗客はそれを見て安堵したようだった。

指揮センターでは、デレンが民間当局から予定されていた最後の更新報告を受け取った。そこに記された場所は、すでに調査済みであるか、まだ結果が返ってきていない照会の対象だった。確保命令は依然として有効だった。彼は、報告に記されたどの場所も所在確認済みとして扱わないよう指示を添え、更新報告を転送した。

職員が、朝のブリーフィング用に地図を改めて用意すべきかと尋ねた。

デレンはそうするよう答えた。

彼は、その職員が作戦から外された車両のマーカーを削除していくのを見ていた。マーカーが消えた後も、画面には都市が残っていた。

彼らが捜していた二人が互いを見つけたことを示す場所は、その地図にはなかった。

バスの中で、レイチェルは医療協会についてリアンから聞いたことをロイに話していた。伝言は届けられた。エイドリアンとイマニは記録の調査を続け、ミンに保管を委ねた資料はそのまま彼女の手元に残ることになっていた。

ロイは、自分の身体の状態が許すようになったら、彼女は研究に戻りたいかと尋ねた。

「ええ」と彼女は答えた。「でも、二人でできることは、もっと長く生きる方法を見つけることだけだと決めてしまいたくはないの」

彼はその言葉について考えた。

記憶にある人生の大半で、より多くの時間を得るという考えは、その時間を得るためにしなければならないことと切り離せないものだった。残されているかもしれない日々の数によって、あらかじめ過ごし方を決められていない一日を想像することは、ほとんど許されてこなかった。

「ほかには何をしたい？」

レイチェルはその問いについて考えた。もう一度海を見たいと言った。近くに暮らす人々の名前を覚えられるくらい長く、どこかに住んでみたい。今まで取り組んできた研究とは何の関係もないものを読んでみたかった。

「あなたは？」

彼は窓の外を見た。この辺りでは道路脇の明かりの間隔が、都市の中心部よりも広くなっていた。建物の間には、暗く広がる土地が見える場所があった。そこに何が生えているのか、彼には分からなかった。

「まだ分からない」

「それでいいのよ」と彼女は言った。

かつて彼は、自分の過去についてのある問いに答えられなかった。今、答えを持たないのは未来についての問いだった。その違いが自分にとって重要なのだと気づいた。

バスは、運転手が二人を乗せていくと約束した最後の場所で停まった。レイチェルは建物への道を尋ねた。一緒に降りた乗客が道路の先に並ぶ明かりを指差し、その向こう側に建物があると教えてくれた。

二人は彼女に礼を言い、歩き始めた。

距離は短かった。それでもしばらくすると、ロイは足を止めてもよいかと尋ねた。道路脇にはベンチがあり、その背後に木が生えていた。彼が再び歩けると感じるまで、二人はそこに座った。

レイチェルは空を見上げた。地区の暗い部分の上で、雲が分かれ始めていた。その隙間からいくつかの星が見えた。特別に明るい星ではなかった。

彼女は天文台での観測と、答えることができなかった問いを思い出した。人が消され得る記録、ロイが説明することのできない歳月、そして自らはその制限の中で生きる義務を負わない人々によって限界を定められた生命のことを考えた。

二人がこの道路までたどり着いたという事実によって、そのどれかが解決したわけではなかった。

都市のどこかには、まだロイの所在を突き止めようとしている人々がいる。別の場所では、人々が自分たちの関心を寄せる研究に何がなされたのかを明らかにし始めている。そして二人とも見たことのない部屋で、番号で呼ばれる一人の女性が、自分自身の生命の時間についての問いを書き留めていた。

レイチェルはその女性を知らなかった。ロイは病院の外で一度だけ彼女に会っていた。いつ再び会うのか、あるいは再び会うことがあるのかも、二人には分からなかった。

風がベンチの上の木の葉を揺らした。ロイは教えてもらった建物の方を見た。入り口には明かりが灯っていた。

「行こうか？」と彼は尋ねた。

レイチェルは立ち上がり、彼が立ち上がる間、そのそばで待った。

二人は誰もいなくなったベンチを後にして、明かりへ向かって歩いた。建物の先には街灯のない地域へと道路が続いていた。どこへ通じているのか、レイチェルには見えなかった。

今夜、二人には過ごす場所がある。

明日には、道がある。

第10章 終。